進駐して来た日本兵は全て日本人学校を兵舎として使い、生徒は臨機応変に仮教室を設定して分割教育を強いられることになった。

駐留日本軍は耐久戦に備え自給自足を名目に麻畠は全て野菜畠に変じられ、家畜は食肉並びに運搬用に殆どが強制徴発されていった。昭和１８年後半に至り皇軍の前線も敗戦の色濃くなり出し男性は全て兵役に老人は軍属として、小学校終了以上男子少年も含めて軍務に服することになり、家には婦女子のみが残されることになった。通貨は、日本軍票に切り替わり地元住民も日本軍に協力すべく日本軍歌が徹底教育された。ササ（現ダバオ空港）マテナには飛行場建設が進められ、米軍迎撃作戦は急ピッチに進められていった。かつて邦人移民としての誇り高い麻栽培の血と汗の結晶ダバオの開拓地はかくして日本軍の横暴な努号の中に消えていった。

○戦時下のダバオ

戦況は益々敗戦の色が濃くなってきた昭和１９年の末頃からダバオにも米軍艦載機による爆弾投下、機銃掃射が頻繁に行われる様になった。小生は昭和１５年１２月にダバオのバヤバス小学校６年の課程を終了、昭和１６年２月に進学のためダバオの親元を離れて弟と郷里沖縄へ帰って来ました。従って昭和１６年１２月８日大戦勃発後のタバオについては家族並びに知人友人よりの情報に基づき記すことにいたします。

わが家５人の家族も長兄（２８歳）は現地海軍軍需部の経理担当軍属として軍務に服していた。ダバオ生まれの次兄（１９歳）は陸軍に召集されていた。父（５８歳）は老齢で召集は免れたが現地地理に詳しいことと現地語を解することから軍の食糧調達係の命を任じられ定期的に野菜、肉類を軍に搬入していた。父の特命はわが家には幸運だったと言える。父は家に滞在が許され、軍から預かった食肉、野菜の購入資金を携え、地方を巡り歩き適当な物件を探し廻り、これを調達し、これを届けるだけで良かった。特に時間に縛られることも軍の直接看視もなく幸運だったと言える。

しかしこの時点で我が家は全て働手を無くしてしまった。連日の艦砲射撃と爆弾投下が激しくなり飛行場を始め日本軍の諸施設は甚大な被害を受ける状態になり、敵の上陸も間近に迫って来た。

１９年９月になるとダバオの上空にも米軍機が飛来してつくったばかりの飛行場を爆撃したり、軍需基地、ダバオ市内は爆撃で破壊されてしまいました。ダバオ市内の家族、学童は各耕地に分散して避難生活が始まりました。軍部も海岸線から後退し、陣地の構築に学校を壊したり、領事館などの大きな建物も壊して材木を持ち去りました。

米軍はついに２０年４月１７日にコタバトに上陸し、２９日にはデゴスを突破してダバオに進攻して来ました。陸軍の原田中将が率いる第百師団は在留日本人の避難をタモガン奥地に命じました。陸軍部隊は手足まといになる在留日本人を捨て残して、奥地へ奥地へ

と逃げ込んでしまい指揮命令は乱れ、戦闘力は全くなくなり敗兵になってしまいました。在留日本人の家族が僅かばかりの食糧を命の綱にして所持しているものを銃を突きつけて略奪したり、同胞を殺したりして婦女子を餓死させ、タモガン逃避行はまさに地獄谷で他に類をみない悲劇でした。

タモガン奥地のジャングルに向けて陸軍部隊、在留日本人が約３万人以上がいっきょに雪崩込んだ道筋に爆撃と砲撃で死体の散乱する地獄への道ができました。それに加えて先に逃げ込んだ陸軍部隊に道中の食べ物はすべて採りつくされ、後から追う在留日本人家族は餓死者が続出してしまいました。

海軍部隊は別な方向に逃げ、最後まで統率され、在留日本人の食糧を略奪したり、同胞を殺したりする悲惨な事件はありませんでした。タモガン山中での在留日本人の死者の数は４千人とも、５千人ともいわれております。

また、ジャングルの中をさまよい歩き、やっとの思いで生き延びた終戦で収容所まで辿り着いたが、栄養失調の回復もみないで亡くなった方が一日、四十体ともいわれ、三千七百人といわれております。ダバオでの陸海軍と民間人の戦禍による多くの犠牲者の数は２万人ともいわれております。

生き長らえて日本に引き揚げた私たちは苦労して、現在に至り、生活も安定して生きる喜びを味わっております。敗戦からすでに半世紀がたちます。生まれ育った楽園のダバオ、学童時代に学んだ学窓時代、戦時中の軍部協力時代、ジャングル逃避行時代から引揚げと、ダバオの思い出は尽きません。

日本人の去ったダバオのマニラ麻は完全に消滅してしまいました。いまではアバカは見られません。昔のアバカの葉波の一望は草原に変わってしまい、逃避行のタモガン山中の大樹は伐採されてしまい、ジャングルは見られなく、ハゲ山に変化してしまいました。昔から変化のないのが、貧しさと電気もなく、住む家は小屋で食べるだけの生活は文化果つる姿がなんとも昔のダバオを知る身にははがゆい思いがします。

日本人に対する悪感情の薄れた４３年８月、戦後初めてダバオ墓参団の８０名が訪れて、残された御魂の供養をしたのが始まりでした。そして、残留日本人二世たちとの交流も始まり、毎年ダバオに多くの慰霊訪問が行われております。各所にある慰霊碑の御魂は訪れを待ち望んでおります。生き長らえた者の勤めとして線香の一本も挙げたいものです。